広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	広島方言
Author(s)	プラムンチャイ スパッティニー,
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集 , 1995 : 1 - 12
Issue Date	1996-03-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039363
Right	
Relation	

広島方言

プラムンチャイ　スパッティニー

1　はじめに

日本には色々な方言が存在することが認められている。全国単一標準語でしか話さないわけではない。標準語のもとの東京語にも幾つかの方言が潜在すると言われている。公式の場合やマス・メディアなどで標準語が使われることが多いので、方言を使ったコミュニケーションは少ないと思われがちだが、日常生活の中では方言が用いられることが多い。それは方言の魅力だと思う。

日本語を外国語として習っている私たち外国人は標準語・共通語を教育されてきたが、広島弁のような方言が混入して用いられると、なかなか理解しにくい。しかし、広島に来て、実際に地元の広島の人と付き合ったりするにつれて、だんだん広島方言を耳にするようになってきた。実際に話される広島弁は教わってきたことと多少異なっており、とても興味深い。「何々ジャケン」を始めとした広島方言に特徴的な表現や語彙は面白くて味のあるものが多い。私たちはせっかく広島に留学しているのだから、広島の人々と交流する機会を生かして、広島弁を身につけて帰国できれば、よいと思う。広島方言の知識を得、方言が理解できるようになったら、きっと広島の人々ともっと親しく友達になれるだろう。

小論では標準語との比較をまじえつつ、広島方言の特徴を考察していこうと思う。

2　広島方言の語彙

ちびる	減る	みてる	無くなる
たう	届く		
はしる	痛い　痛む　表面に近い方での鋭い急激な痛み「歯がはしる」などと言う。		
うずく	痛い　痛む　深部でのずきずきと迫って止まない痛み		
にがる	痛い　腹、筋肉の痛み	ねぶる	舐める
いらう	触る	はぶてる	（怒って）ふくれる
のける	退ける	たまげる	驚く
しぬる	疲れる	こける	転ぶ
めげる	壊れる	めがす	壊す
いぬる	帰る	（お）腹がふとる	（お）腹が一杯になる
よけい	たくさん	えっと	たくさん

(2)

ちっと	ちょっと	ほんま	本当
えらい	非常に	ぶち	とても（強調の接頭語）
いけん	だめ		

いびせい	恐い	しんどい	つかれる
せわしい	忙しい	みやすい	簡単　易しい
たいぎい	きつい　疲れる	ええ	いい
いだしい	難しい		

あがあに　こがあに　そがあに　ー　あんなに　こんなに　そんなに
あんとに　こんとに　そんなに　ー　あんなに　こんなに　そんなに

なんぼ	いくら	なすび	なす

わし	わたし（主に男性が用いる）
うち	わたし（女性の言葉）

3　アクセントについて

3・1　語アクセント

標準語と異なる広島方言の語アクセント型を類別語彙表に従って、名詞、動詞、形容詞の順に示すと次のようになる。（かっこの中は標準語のアクセント型）

広島方言の語アクセント型と標準語の語アクセント型の違いは、標準語が平板型であるのに対して広島方言ではその型が滅多に見られないということである。助詞の付着によって、アクセントの高音部が伸びる標準語の平板型という傾向は広島方言にはほとんどない。しかし、全体的には広島方言の語アクセントと標準語の語アクセントはあまり差がないと考えられる。

以下、標準語の語アクセント型と異なる広島方言の語アクセント型のみを記す。

名詞

＜一音節　第一類＞

「帆」　ホガ（ホガ）　「世」　ヨガ　（ヨガ）

＜二音節　第二類＞

「滝」　タキ　タキガ　（タキ　タキガ）

「塵」　チリ　チリガ　（チリ　チリガ）

以上の二語を除く第二類はすべて次のような型を取る。

「飴」　アメ　アメガ　（アメ　アメガ）
「水」　ミズ　ミズガ　（ミズ　ミズガ）

＜二音節　第三類＞
「神」　カミ　カミガ　（カミ　カミガ）
「雲」　クモ　クモガ　（クモ　クモガ）

高音部の移動について、広島地域の二音節語の語アクセントのうち、「滝」のような第二類は標準語と異なり、助詞がついても高音部の移動が起こらない。標準語の語アクセントでは平板とされるのに対し、広島方言の語アクセントはそうでない傾向が強い。例えば、「飴」「水」などの語は助詞が付着しない場合は「アメ」「ミズ」と、標準語と同様に発音されるのに、助詞が付着すると○●→○●●の標準語アクセント型と違い、○●→○○●のように高音部の助詞の所に変わる。しかしながら、単語によって、助詞を付けても、変化がない「神」「雲」のような語も存在する。

＜三音節　第一類＞
「着物」　キモノ　キモノガ　（キモノ　キモノガ）
「庇」　ヒサシ　ヒサシガ　（ヒサシ　ヒサシガ）
「南」　ミナミ　ミナミガ　（ミナミ　ミナミガ）

上記の語においては　アクセントの移動が見られないが、残りのほとんどの語は　「欠伸」アクビ　アクビガ　（アクビ　アクビガ）のように　助詞の添加による高音部の移動が見られる。

＜三音節　第二類＞
①　「小豆」　「毛抜き」　「二つ」　「二人」は次のように発音される。
　アズキ　アズキガ　（アズキ　アズキガ）
②　「釣瓶」　「とかけ」「百足」は　次のように発音される。
　ツルベ　ツルベガ　（ツルベ　ツルベガ）
③　「緑」　ミドリ　（ミドリ）
　「昨夜」　ユーベ　（ユーベ）
残りの「間」などの語は　アイダ　アイダガ　（アイダ　アイダガ）のようになる。

＜三音節　第三類＞
「鮑」　「栄螺」　「二十歳」は次のように発音される。

アワビ　(アワビ)

「力」　チカラ　(チカラ)

上記の語は高音部が真ん中に出て来る。

<三音節　第四類>

①　「思い」オモイ　オモイガ(オモイ　オモイガ)

高音部の移動が起こる。

②　「瓦」　「拳」は次のように発音される。

カワラ　(カワラ)

③　「畑」　「林」は次のように発音される。

ハタケ　(ハタケ)

④　「紅葉」　「蕨」は次のように発音される。

モミジ　(モミジ)

その他の第四類の語は標準語と同じように発音される。

<三音節　第五類)

①　「朝日」　「命」　「蝶」「姿」「涙」「錦」「枕」「眼」の語は　アサヒ(アサヒ)のように発音される。

②　「油」　「簾」　「柱」はアブラ　アブラガ　(アブラ　アブラガ)のように発音される。

<三音節　第六類>

「烏」　「高さ」　「狸」などの語自体のアクセントは標準語と等しいが、助詞を加える場合は標準語の　「　○○●→○○●○　」型に対して、　広島の語アクセントは「　○●●→○●●●　」のようになる。

<三音節　第七類>

「後ろ」「鯨」は　ウシロ(ウシロ)と一番前の音節が上がるように発音される。

前述したように標準語のアクセントは一般的に平板である。それに対し、広島方言の中には複雑な型があると考えられる。標準語なら、単語に助詞を添加すると、高音部が助詞まで伸びる傾向がある。それに対し、広島方言ではそういう現象がめったに見られない。広島方言では助詞が加わっても、加わらなくても、同じ位置にアクセントが保たれたままであり、アクセントの移動が起こらない。

動詞

動詞の語アクセントは前述の名詞と同じように標準語とあまり違いがない。しかし、幾つかの特別な語もある。

「違う」　チガウ　（チガウ）

「上がる」　アガル　（アガル）

「与える」　アタエル　（アタエル）

形容詞

広島語の形容詞アクセントはほとんど標準語との違いが感じられない。しかし標準語と異なる発音のし方は幾つかある。例えば、標準語で、アカイ　（赤い）、カナシイ（悲しい）のような型をとる語が、アカイ　カナシー　のように発音される。しかし、広島には標準語と同じく（アカイ、カナシー）と発音する地域もまたある。だから一概に標準語とまったく違うとも言えない。

このように同じ広島県内でも、標準語と同じように発音される型とそうでない型の二つのものが存在することが分かる。地域によってどのように発音されているかを地図に表すことができる。ここでは形容詞「厚い」の分布地域を例に取り上げたいと思う。

神鳥武彦著『講座方言学』p.123より

この図を見ると、広島地域内でのアクセントの地域差の状況も理解されるであろう。

3・2　文アクセント

語アクセントの大体の傾向は標準語のアクセント傾向に類同している。文アクセントの傾向においても、標準語に類同するところが少なくない。

広島方言の文アクセントの特徴といえば、後上がり調と後下がり調の二つが注目される。

1）後上がり調

特徴のある後上がり調には、――^― 調のものと――┐― 調のものとがある。

―　ホリャー　ワカリマセン。　それは分かりません。

この例は、一文が一つの後上がり調に囲まれているものである

ー　ホー　ユー　コター　ワカランヨノー。　そういうことは分かりません。

この例では、「ホー　ユー　コター」　「ワカラン」で、それぞれ後上がり調が出てくるが、この文表現全体をしめくくる文アクセントは「ノー」に認められる高音部である。この高音部が文表現全体を一つの ——∧— 調のものとしている。この調子は、備後南部を除く広島県地域の特色をもつ文アクセントである。

もう一つの ——┐ 調は女性によく使用されるものである。この文アクセントは、「ナー」「ジャー」などの文末詞とともに用いられることが多い。

ー　ソレデ　エー　ジャー。　それでいいじゃない。

ー　ドーシテモ　ソケー　イッテナー。　どうしてもそこへ行ってねえ。

次節では、広島方言の文アクセントに顕著な後下がり調について述べる。

2）後下がり調

広島方言では、文全体上であるいは、文の後で、あるいは文の途中で極端な「後下がり」が起こることがある。

ー　アヤメ　ガ　アリマス。　あやめがあります。

よく丁寧語の「マス」「マシタ」が使われるとき、「後下がり」が起こることがある。この種の「後下がり」は広島県地方ではあまり聞かれないかもしれない。それゆえ特異とされる。それが山口県地方では一般に使用されるようになっているので　山口県境に近ければ、近いほど　わりとよく耳にするようである。

特に、「アリマス」の言い方はよく「アリマス」また「アリマス」で発音される。

ー　セッケンワ　アリマス。　石鹸はあります。

ー　ナンデモヤリマス。　何でもやります。

などについても　「アリマス」　「ヤリマス」が注目され、ここに特異な「後下がり」が認められる。

ー　アリガトウ　ゴザイマス。ありがとうございます。の場合も同様に下がる。

この後下がり調は広島県地域でも山口県地域でも丁寧形として使用されることが多い。

4　音韻　・　音声

4・1　音節上の音変化

1）　音節の交替

「するな」の表現を広島地域で　「スンナ」　のように言う。また、西広島では「センナ」という。／ｒｕ／→／ｎ／の交替が認められる。安芸西北部では、一段活用動詞すべてにわたって、「ミセンナ（見せるな）」「オキンナ（起きるな）」のように言っている。

2）　音節の省略

副助詞「ばかり」を「バー」としか言わない。「バー」というのは備後地域だけで盛んに用いられている言葉である。

例えば、共通語で「分からない事ばかりだ」と言うとすれば、備後地域では「ワカランコトバージャ」というようである。

3）　子音の変化

広島地域では／s／→／h／の子音の変化が見られる。この変化は、「ソ」音の時もっとも顕著である。（この傾向は山口県地域の方が強く見られる。）

例）　ー　ホーヨ。　　そうよ。

　　ー　ホレ　ミンサイヤ。　　それ見なさい。

これらは「ソ」音に／s／→／h／の事象の認められるものである。

4・2　連語上の音声変化

1）　「は」が付加される場合

助詞「は」が付けられた語彙の場合は、「は」音の変化の法則がある。末尾音の「a」「u」「o」なら、終わりの音が長く引き伸ばされる。たとえば、「坂」「靴」「顔」と接する場合は、「サカー」「クツァー」「カワー」の形となる。「虫」「池」の場合、つまり「i」「e」で終わるのは「ムシャー」「イキャー」のように拗音化する。

従って、末尾音が「a」「u」「o」の時、「は」が付いたら、それぞれの音を引き伸ばす。末尾音が「i」「e」の時、「は」が付いたら、拗音化させて引き伸ばす。

2）　「を」が付加されている場合

格助詞「を」が付けられた語彙の場合は長呼音が起こる、「を」音の変化の法則がある「坂」「靴」「顔」など末尾音が「a」「u」「o」の時は、「サカー」、「クツー」、「カオー」のように、それぞれの終わりの音が長く引き伸ばされる。「虫」「池」の場合つまり、「i」と「e」で終わる場合には、「ムシュー」、「イキュー」のように拗音化する。

従って、末尾音が「a」「u」「o」の時、「を」が付いたら、それぞれの音を引き伸ばす。末尾音が「i」「e」の時、「を」が付いたら、拗音化させて引き伸ばす。

例）　ー　ムシューエット　トッチャッタ。　虫をたくさんとっちゃた。

　　ー　クツーヌイジャ、イケンヨ。　　靴をぬいでは、いけないよ。

5　広島地域特有の表現

5・1広島方言を特徴づける文末表現

代表的な文末詞　「ノー」

「今日は暑いね。」の「ね」にあたる言葉を広島地域では「ノー」と言う。特に、安芸では割合に「ノー（ノ）」の形が用いられている。

「キンノー　ノ　ワシガノウ　イッテカラノー。」

昨日ね　私がね　行ってからね。

のように「ノー」形が用いられる。

しかし、広島県内すべてで「ノー」という文末詞だけが用いられるわけではない。備前備中につづく備後では「ナー（ナ）」形がよく用いられる。地域によって、この言葉に関する意識が違い、言葉遣いも異なっている。というのは、備後北部では通常「ノー（ノ）」を用いるが上品な物言いには　「ナー（ナ）」を用いる。安芸の都市部では上品な物言いには「ネー（ネ）」を用いる。

「ノー」と「ナー」を比較すると　「ノー」の方が広島弁らしさを感じる。

さて、「ノー」と「ナー」の分布地域を観察してみよう。「ノー」は主に広島県・山口県で使用されている。一方の「ナー」は関西地方から四国地方にかけて、大変強い勢力をもっている。言い換えれば、「ノー」は広島・山口地域独特の文末詞と見られているが、「ナー」はより広い地域を占め、用いられていると言えるだろう。また「ノー」は「ナー」に回りを取り囲まれているとも言える。

最後に　「ノー」が使用される例を挙げてみよう。

ー　ホージャノー。　　そうだねえ。

ー　ヒチコーフリャガレルケー　エットタマリャガッタノー。

しつこく降るから、たくさんたまったねえ。

5・2　「ジャケン」　（ジャケー）

広島では「何々ジャケン」をよく耳にする。このパターンを標準語に直すとすれば、「ジャ」が指定断定の助動詞「だ」にあたり、「ケン」は理由を表す助詞「から」にあたる

「ジャ」

広島県地域は「ジャ」使用地域が広い。「ダ」という言葉が使用される地域もあるけれども、使用される範囲は比較的に「ジャ」より狭い。「ダ」、「ジャ」の他に「ンダ」という言い方も存在する。

これらの使用状況は次のように図示される。

神鳥武彦著『講座方言学』p.133より

「ジャ」を使った文末表現には、「ジャケン」という言い方だけでなく「ジャロウ」（だろう）という言い方もある。

例）　ー　アリャー　ハナシガ　ジョーズジャケン。
　　あれは（あの人は）話が上手だから。
　　ー　イケタ。イケタンジャロウ。
　　行けた。行けたんじゃろう。

「ケン」　（ケー）

前述したように、広島方言の接続助詞の「ケン」とは「から」の意味である。広島県全域で「ケン」が用いられているが、備後地域では「ケー」がよく用いられる。

例）　ー　アメガフッテイタケン、イケンカッタンヨ。

5・3　進行態の「～ヨル」と結果継続態の「～トル」

広島地域では進行態は「～ヨル」の形を、結果継続態は「～トル」の形をとる。

ー　進行態「～ヨル」

「アメガ　フリョール。ー　雨が降っている。」のように拗長音化する地域と、広島市などのように「フリヨル」と拗長音化しない地域がある。しかしながら、拗長音化するものの方が一般的で自然に用いられる。

ー　結果継続態「～トル」

「アメガ　フットル。」を標準語に直すと、前述と同様に「雨が降っている」にしかならない。しかし、広島弁では「～トル」の形は　雨が降った結果も表す事が出来る。加えて、「～トル」の形は「存在」の意味も表す。

　　ー　ヨー　シットルンジャ。　よく知っているんです。
　　ー　ヒロシマモ　ズイブン　カワットル。　広島もずいぶん変わっている。

「～ヨル」が拗音化されて用いられる地域があるのと同様に「～トル」が拗音化された「～チョル」を用いる地域もある。

なお、「～ヨル」と「～トル」では「～トル」の方が比較的よく残っている。

5・4　打消の助動詞

　　「コリャー　ワカランノー。」　これは分からないねえ。
　　「アノヒトに　イワン。」　あの人に言わない。
　　「イカン」　行かない。「イカンカッタ。」　行かなかった。
　　「アンマリ　アサハヤク　オキラレン。」　あまり朝早く起きられない。

打消表現法には「ぬ」に由来する「ン」を用いる。打消完了「なかった」に対応する言い方は幾つかある。一般的には「ンカッタ」が用いられる事が多いが、「～ナンダ」「～ザッタ」が用いられる事もある。「～ザッタ」は、安芸でよく使われるが、県内の他地域

でも聞くことが出来る。瀬戸内海の中部から東部にかけては「イワナンダ」の「～ナンダ」が分布している。

しかし、最近「～ザッタ」「～ナンダ」という言葉を耳にする事があまりなくなってきた。これは古い言い方とみなされているからである。「～ンカッタ」が主に使われるのに対して、「～ザッタ」は老年層で使われる。

さらに、用言に「ン」の接続する単純否認の表現に対して、強調否認の表現法がある。

「ダレモ　キャーヘン」　誰も来はしない。

「～ハ　ヘン（～はしない）」の形がそれである。

「～ン」の形が一般であると言っても、その他に「イカヌ」（行かない）　「シラノ」（知らない）の「～ヌ」「～ノ」も存在する。

5・5　命令形

広島地域では　軽い気持ちで、命令を言い表わすときに　「何々ンサイ」という言い方をする。「何々ンサイ」形が使われると、そこには軽い敬意が含まれる。比較的女性の方に使われる。

ココニキンサイ。　ここに来て下さい。

ハヤクタベンサイ。早く食べてください。

女性は「～シンサイ」の代わりに「～シンチャイ」を使うこともある。これは子供に対して、優しく指示する時に用いられることが多い。

5．6　最近、使われなくなった表現

1）「ガンス」

広島方言の「ガンス」は標準語の「です」にあたる。これは丁寧で上品だが、古い言い方である。備後ではよく「ヤンス」を「ガンス」の代わりに使う。

古い挨拶にも「ガンス」がよく出てくる。「オハヨウガンス。」や過去形の「オハヨウガンシタ。」である。しかし、最近、これらはあまり用いられなくなってきた。今、「ガンス」を使うのは老年層でしかない。

2）　挨拶

前述したように、朝の挨には「ガンス」や「ガンシタ」が用いられるが、両者では「ガンシタ」の方がより丁寧な表現である。また、これらに加えて「お早くある」という特異な挨拶もある。この形式は、広島・山口の県境で広く用いられるものである。

なお、標準語の「お元気ですか」の代わりに、老人層では「マメデゴザンスカ」と言ったりもする。

福山市一帯では、謝辞として「ありがとう」の代わりに「ダンダン」と言う。さらに、もっと丁寧なのは、「オーキニ」という表現である。

5・7　標準語とは違う意味をもつ表現

1）　「～チャッタ」

標準語の「先生が来ちゃった。」という表現には、先生の来たことは自分に迷惑をかけるというやや非難めいた気持ちは含まれている。ところが、広島方言の「キチャッタ」には「来なくていいのに」という非難の気持ちは含まれない。広島方言の「センセイガ　キチャッタ」は「先生がおいでになった」の意味で、尊敬表現である。それゆえ、標準語とは違っているのである。同じ「チャッタ」でありながら、一方ではぞんざいな言葉、もう一方では良い言葉になっているのである。

広島方言の「キチャッタ」は「キテジャッタ」に由来する、もともと敬語法の言葉遣いであり、「テジャ＋尊敬表現」と呼ばれている。これは「～て＋で＋あった」というパターンから変化してきたものだと考えられている。「テ＋デ＋アッタ」→「テジャッタ」→「チャッタ」の変化である。

テジャ敬語は広島地域だけでなく、島根　山口などの西日本で盛んに用いれている。

2）　「～テ」

「アシタ、イッテ。」という疑問表現を広島でよく耳にするだろうと思う。県外から来た人は、初めてこの表現を聞く時、大いに戸惑うそうである。このように言われたら、普通「明日、行ってくれ」という命令表現だとまちがってしまうだろう。しかし、広島方言で「アシタ、イッテ」といえば、「明日は行きますか。」という疑問の意味にもなる。広島方言のこの「～テ」形は助動詞の「～て」ではなく、前節と同様に「～テダ」形式の尊敬方言法の述部である。（「テ」敬語法とも言ってよいもの）だから、当方言の、「～テデス」から派生した「～テ」の言い方には軽い尊敬の意味が含まれている。

6　おわりに

小論では標準語との比較をまじえ、広島方言特有の表現を中心に考察した。これまでの調査で明らかになった広島方言の表現や語彙の特徴は次のとおりである。

①　標準語の語アクセントが平板型であるのに対して、広島方言ではその型が滅多に見られない。

②　一口に広島方言といっても、それは幾つかの地域に分けられ、違いが見られる。

③　教育やマスコミなどの影響によって、「ガンス」「ヨル」のような表現は廃れつつある。

④　広島方言には「～チャッタ」「～テ」のように標準語と同じ形式をもちながら、意味の違う表現もある。

小論で考察したのは広島方言の特徴の一部だけであるが、今後とも資料を集め、広島方言について研究を進めていきたいと思う。

参考文献

1．藤原与一．　１９７５．「方言生活指導論」．　三省堂

2．藤原与一．　１９７７．「昭和日本語の方言」．　三弥井書店

3．神鳥武彦．　１９８２．「講座方言学」．　国書刊行会

4．町博光．　１９８２．「今じゃきぇ　広島弁」．　第一法規出版株式会社

5．ひろしま国際センター．　１９９２　「もみじⅡ」．　ひろしま国際センター